國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 居駒永幸著 『古事記の成立 [歌と散文] の表現史』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯泉, 健司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001628

〔書評〕

居駒永幸著

『古事記の成立 「歌と散文」の表現史』
飯泉健司

歌から読む『古事記』の成り立ち

「古事記、分かったり！」

読み終えて、こんな調まどの声が聞こえてくるような気がした。

歌から『古事記』を読み解く。歌によって歴史を伝える文学がある。歌から広がる世界を解釈することで散文が出来上がる、と居駒氏は説く。

かつて系譜の叙述から散文が生まれるとする研究があった。しかし歌から散文の生成を説く研究はなかった。この点に居駒氏の方法論の斬新さがある。

これまで著者は、「歌の叙事」（歌に読みこまれた事件や歴史）について、さまざまな角度から検証してきた（『古代の歌と叙

事芸史』笠間書院、二〇〇三年三月）。

その成果を踏まえて、本書では「歌の叙事」という観点から『古事記』の成立過程を段階的に説明する。まず歌舞によって宮廷史を伝える歴史叙述が楽府等にあった。その一部が歌曲名をもつ歌として伝わり、『古事記』もこの種の資料を基にしている。宮廷歌舞で使用された歌は、宮廷史を伝える歌なので「歌の叙事」を有する。その「歌の叙事」を理解・解釈する作業を経て、歌を中心とした散文（歴史叙述）が出来上がる。この歴史叙述が、『古事記』の主題である日継の絶対性と正統性とを語る「日継の物語」と一体化して『古事記』の文体が成立した、という。これを天武朝の原「古事記」と想定する。最終的に太安万侶が、一字一音表記の歌と和文体の散文とを整えたとみる。以上、本書の主旨は、第五章2「古事記」の文体―「歌と散文」の叙述法―及び同3「古事記の成立―「歌と散文」の表現史―」において明確になる。以下、本書の概要を述べる。

第一章「主題と研究方法」では、研究史を踏まえながら、宮廷歌舞に伝わる「歌の叙事」という見方の有効性を説く。

第二章「古事記」「日本書紀」の歌とその表現では、宮廷歌謡が出現する背景を想定し、「宮廷・官人と庶民とのあいだを交流する」歌謡の生態を述べる。民間の歌垣と官人とが交流

する中で、歌垣的な発想をもつ短歌体和歌が生成する等(3節)、宮廷歌謡は複数のヴァリアント(異同、異伝等)をもつようになる(2節)。蟹の歌や巨樹説話も宮廷と地方との交流が影響している(4節・5節)。

第三章「古事記」「日本書紀」「風土記」の歌と散文叙述」では、記紀風土記の各書における主題と歌・散文との関わりを分析する。「古事記」は日継ぎの権威を表すために歌と散文を用い(2節)、「日本書紀」は神話の現出と、宮廷歌舞による「[嗣]」(ヒツギ。皇位継承)の歴史叙述のために「歌の叙事」を用いる(4節)。「丹後国風土記」は、養老期の文学的環境が生み出した、漢文体の説話に追和歌を加えるという新たな詠出方法を用いて浦島子を描く(5節)。

第四章「古事記」「歌と散文」の表現空間」では、宮廷歌曲の「歌の叙事」が、「日継物語」と組み合わせられることによって、「歌の叙事」が増殖することを論じる。宮廷史の歴史叙述と皇位継承の日継物語とが二重構造となつて「歌の叙事」を増殖させる。これを私なりに理解するならば、「古事記」には、歌が生み出す文脈と、天皇家の正統性を語る散文脈とがあり、さらにこの両者が組み合わさることによつて第三の文脈が立ち現れる。それにともない、複数の行間も生まれる。それが『古事記』

の表現空間を広げていることを述べているのだと読んだ。

第五章「古事記」「歌と散文」の文体と成立」では、宮廷歌曲が、原「古事記」の記述となるまでの経緯を想定する。「古事記」の文体が成立する過程である。先述のとおり、第五章において、本書の到達点が明確にされる。ここにいたり「古事記」の文章が、どのような経緯で成り立ち、何を表現しようとしていたのかが解き明かされる。「古事記」の文体という内部情報から成立過程が浮き彫りになるくだけは、圧巻であった。

本書における一番の成果は表現史的に『古事記』の成立を考察した点にある。

従来『古事記』の成立については外部資料に頼つてきた。①『古事記』序文、②『日本書紀』天武一〇年三月条の「帝紀及び上古の諸事」という記載、③『弘仁私記』序に太安万侶が『日本書紀』編纂に関わつたとする記述等を中心に論じる傾向にあった。当たり前のことながらこれらの資料は、『古事記』序文も含め、『古事記』本文に記載された内容ではない。「古事記」序文に記された「帝紀」「旧辞」「稗田阿礼」「太安万侶」「天武天皇」といったキーワードを手がかりに『古事記』本文の成立は考えられてきた。

その意味で、『古事記』本文内部の文体から『古事記』の成

立を論じる本書は画期的な研究といえる。居駒氏の成立論は序文に記されたキーワードとも対応している。その上で、韻文と散文とが融合した『古事記』のような文体の歴史叙述は、僅かに中国史書（『史記』）には見られるものの、八世紀初頭の東アジアの歴史書においては異例の存在であり、『古事記』が「考案した文体」であった（362頁）とする。

『古事記』の本文自体の分析による成立論は、今後、新たな切り口を拓くことになろう。

成立を解き明かす鍵は『古事記』の文体にあった。身近なところに鍵は隠れていた。

「しつやったり！」

居駒氏は、そんな気分なのではないか。稗田阿礼・太安万侶が著者に憑依したかのような言い回しが、本書の文章の端々に散見する。例えば285頁に、

『古事記』をどう読むかという私たちの視点は、本文の細部にわたるこの作業から始まる。

と記す。この「私たちの視点」に、我以外のモノが憑依した眼差しを感じてしまうのは私だけであろうか。私はこの手の文に、書き手だけが味わえるエクスタシーを感じる。『徒然草』がいう「あやしうこそものぐるほしけれ」といった気分をである。

本書は土橋寛の独立歌謡論を否定する。散文に民間歌謡を嵌めこんだとする見方である。かつては一世を風靡した論であったが、本書を読むと独立歌謡論に空しさを感じてしまう。「歌の叙事」という見方が自明であるかのような迫力が、読者を圧倒する。

居駒氏は永年南島歌謡を調査してきた（『歌の原初へ—宮古島狩俣の神歌と神話』おうふう、二〇一四年四月）。「歌の叙事」のヒントは南島歌謡にある（前掲『古代の歌と叙事文芸史』）。

また三人称と一人称とが混在するのは人物を現前させる表現方法であるとし、その典型例を南島歌謡に求める（本書第二章6「歌謡の人称の仕組み」）。南島歌謡研究の成果に基づく好論が多々ある。南島歌謡を糸口とした研究スタイルからすれば、居駒氏は独立歌謡論に与してもおかしくはない。

にもかかわらず、氏は独立歌謡論を否定する。それは、民俗と文学とを峻別する文学者の良識なのではなからうか。『古事記』の表現・文体に限定して、言えることだけを言う。必要以上に民俗には頼らない。そのストイックな良識が『古事記』の文体の成立を見つけ出すことになる。文字に書かれた記載歌謡という限定を設けることによって、本書は歌謡における一字一音表記や散文部の表現を読み解くことに成功している。随所で

記される詳細な語釈から導かれた表現・文体の理解は、質の良い注釈でもある。このあたり、続編となる古事記歌謡の注釈書に生かされるものと期待される。

繰り返し返すが、居駒論の核となる「歌の叙事」を発見するきっかけは、沖縄県宮古島を中心とする南島歌謡の調査。ただし本人曰く、「歌の叙事」のヒントは折口信夫の「大歌」（宮廷詩）論にあると記す（22頁及び「あとがき」等）。その点で居駒氏は、國學院大学の民俗学的な研究を継承している。

ただし、國學院の伝統を受けつつも、歌の叙事という観点から『古事記』の成立を解明した功績は、独自の方法論として高く評価される。

（A5版上製、四四〇頁、花鳥社、二〇二四年一〇月発行、定価一二〇〇〇円＋税）